

# 学校支援を積極的に進めよう

～ 教育活動に積極的に関わり、生徒の健全育成を推進する P T A 活動 ～

岡崎市立矢作中学校 P T A

## 1 学区及び学校の概要

本校は、明治 25 年に創立され、長い歴史と伝統を誇る。岡崎市の西部に位置し、学校の北には国道 1 号線が、南には名鉄本線が、そして西には岡崎環状線が通っており、アクセスが大変良好な学校である。今年度の生徒数は 683 名で、地域との連携を重視した教育活動を展開している。保護者や地域による温かい協力体制を築きながら、教育環境の整備や行事運営に取り組んでいる。

## 2 研究のねらい

本校は、校訓「目標を高く掲げ、苦痛を避けず、素直に伸びよう」を掲げ、21 世紀の担い手としての知徳体の調和のとれた生徒の育成に努めている。このような生徒を育成するには、家庭や地域と連携を図り、多くの手で生徒の健全育成を推進することが必要である。本研究は、P T A 活動を通じて学校支援を積極的に推進することの意義と効果を明らかにすることを目的とする。本研究を通して、家庭や地域との連携を深めることで、学校教育の質的向上を図っていきたい。

## 3 研究の仮説

家庭や地域が学校教育活動に積極的に関わり、家庭と学校とのつながりを強化すれば、健全な生徒の育成を推進することができるであろう。

## 4 研究の方法

本校 P T A が実施した資源回収および文化祭における寄贈品バザー・物販について、活動内容、参加者の声、運営体制などを記録・分析し、学校支援の実態と課題を明らかにする。

## 5 研究の実践

### (1) 資源回収

本校では 6 月と 2 月の年に 2 回、P T A 役員と P T A 地区委員、そして、自主的かつ無理のない範囲で参加してくださる保護者の協力の下、新聞、段ボール、アルミ缶等を生徒が中心となって回収している。昨年度の 1 回目の資源回収までは、生徒が自転車や徒歩で地域を回り、資源の回収に当たっていた。しかし、「自転車での回収は危険」という地域住民からの声が大変多かったため、生徒による自転車での回収を取りやめ、さらに、拠点回収場所を矢作中学校のグラウンドのみとし、ドライブスルー方式で実施した。この活動方法について、様々なご意見をいただいたため、持続可能な活動方法を P T A 役員で模索した。その結果、自転車での回収方法は継続して中止とし、各町の回収拠点を増設したうえで、各戸から資源を持ち込んでいただくことを基本とし、資源を持って来られない方のために、



【資源を回収する生徒と保護者】

回収拠点周辺を生徒や保護者が回収に当たることにした。また、PTA役員や地区委員が車で回収に回る方法も取り入れた。PTA役員がこれらの内容を盛り込んだチラシを作成し、各戸へ回覧していただくよう各町総代へ依頼することで周知を図った。回収物は業者に引き渡し、収益を得ている。この収益は、PTA会費の一部として、生徒用の学用品等の購入に活用している。参加した保護者からは、「生徒がよく活動してくれて助かった」という声が多く寄せられた。

## (2) 文化祭における寄贈品バザー・物販

例年、文化祭2日目の午後、事前に保護者から寄贈された制服やジャージ、体操服等をバザー形式で販売している。また、令和4年度から「矢中オリジナルグッズ」と称し、タオル、ネックウォーマー、ひざ掛けを販売している。寄贈品の集約については、卒業期にPTA役員が保護者宛の依頼文書を作成し、今後使用しない制服やジャージ等を寄贈していただくよう依頼している。毎年多くの寄贈品があり、学区の協力体制の強さを実感する。また、「矢中オリジナルグッズ」については、通常の学校生活や登下校時に使用できるものとしており、PTA役員が作成したチラシを家庭へ配付するだけでなく、地域への回覧も行っている。PTA役員のアイデアにより、タオルには、本校卒業生であり、学区で店舗を経営しているダイワスーパー社長の大山皓生氏直筆の本校校訓とメッセージがプリントされている。また、ネックウォーマーとひざ掛けについては、カラーバリエーションを増やしたり、生徒から矢中オリジナルロゴのアイデアを募集してプリントしたりするなどの工夫をしている。

販売当日は、客の呼び込みや会場内での商品の紹介、円滑な会計処置等、PTA役員が適材適所で活動した。その結果、長蛇の列ができ、多くの方に買い物をしていただけた。収益は資源回収同様、生徒用の学用品等の購入費用や学校行事の資金として活用している。



【矢中オリジナルグッズの3品】



【大盛況のバザー・物販】

## 6 研究の考察

資源回収は、持続可能な方法での取組を模索したことで、地域との信頼関係を築く機会となっている。一方で、生徒のボランティア精神を高める活動にもなり、地域や学校のために自ら汗を流すことの大切さを学ぶ機会となった。文化祭での寄贈品バザー・物販は、保護者や地域の学校行事への関心を高める契機となり、保護者の主体的な関わりの促進につながった。これらの活動は、学校支援の質を高めるとともに、地域協働の重要性を示していると考える。

## 7 成果と今後の課題

PTA活動を通じて、学校と地域のつながりが強化され、教育環境の向上に寄与している。一方で、活動参加者の固定化や負担の偏りが課題として挙げられる。ただ、無理のない範囲で学校支援を行っていくうちに、「これなら私でもやれる」と、前向きにPTA活動を行う役員が増えていくことが事実である。今後は、より多様な参加形態や役割分担の工夫を図り、持続可能で保護者の負担を最小限に抑えた柔軟な学校支援体制の構築を目指していく。